

# Varieté

## 「ヴァリエテ」観賞会について

フィルム・ライブラリーでは、その事業の一部として歴史的価値のある芸術性豊かな映画を観賞し研究することとなり、さきに第一回として「ジータフリート」(独、一九二四年)観賞会を開催しましたが、引き続き第二回として「ヴァリエテ」をとり上げ、一般の映画愛好家、研究家に贈ることになりました。

「ヴァリエテ」は、一九二五年(大正一四年)独逸ワーファ会社で製作されたもので、独逸サイレント映画黄金期の代表作の一つです。わが国では、一九二七年五月二〇日から二週間新宿武蔵野館、浅草帝國館で封切され、当時大変な評判で興行的にも大成功を収めました。

## 曲芸団(ヴァリエテ) 10巻

一九二五年度独逸ワーファ映画

- 原作……………フェリックス・ホレンデル
- 脚色・監督……………E・A・デュボン
- 撮影……………カール・フロイント
- 舞台装置……………O・F・ヴェルンドルフ
- キャスト——
- ボス……………エミール・ヤニングス
- その妻……………マリ・デルシャフト
- メルタ・マリ……………リア・ド・ブッテイ
- アルチネリ……………ワーヴィック・ワード

## VARIÉTÉ in 10 Reels

- ‘Boss’……………Emil Jannings
- His Wife……………Maly Delshafte
- Bertha Marie……………Lya de Putti
- Artinelli……………Warwick Ward

From the novel by Felix Hollander,  
Scenarior and Direction by E.A. Dupont,  
Photographed by Carl Freund.

当時のキネマ旬報第二六〇号(一九二七年五月一日号)は、この映画の紹介文を載せ、略筋——もと曲芸師をしていた中年の男ボスは足を怪我してからハンブルグで女房と船乗り相手の小さな見世物小屋をやった

みた。

或る日一人の水夫が彼の所へ可愛い娘を連れて来た。娘は母親に死別して頼るものもないとのことにボスは彼女を引取って世話してやることにした。娘はベルタ・マリと呼ばれてゐた。

ボスの小屋で彼女が踊り始めると多くの船乗り達は彼女の艶麗な肉体に惹き付けられた。船乗りばかりではないボスは遂に彼女に魂を奪はれ女房を残してベルタと墮落した。

伯林に来たボスとベルタは空中曲芸師のアルチネリと一緒に働らくことになった。その内にベルタはアルチネリに誘惑されてボスを裏切るやうになり忍び合ひの楽しさに耽つたが二人の間柄を知つたボスは失望と憤怒の余り、アルチネリに決闘を迫り恨みのナイフを男の胸に刺し通した。そして、さきよく自首して出た。裁判の結果、彼は殺人犯として牢獄へ送られたが彼は何等の弁明もせず黙々として刑に服した。彼が心の中に持つ熱情と憤怒と失望を知るものは誰もなかつたか?(中央映画社輸入)——と報じています。

この映画についての批評も当時数多く見られますがキネマ旬報掲号は「映画時代の泰豊吉氏の評を転載して——芝居とオペラと小説に現はれた曲芸団は数多いが、映画にもその数おびただしきものがあつた。しかし笑ひと涙の一生を送る道化と、拍手をあびつつ一生を捧ぐ曲芸師の生活を描いて、かくまでに傑出したものは、いかなる芸術に求めても求められませんでした。誠に死よりも強しといはれる人間の恋愛と肉慾とはしてなき人間の哀愁と憤怒とが、全幅に溢れ流れ入り湧き上つていて、驚くべき力強いデュボンの監督ぶりに感激したことを忘れません。——と述べています。

又キネマ旬報第二六三号(昭和二年六月一日号)によれば、小山内薫氏は当時読売新聞に批評文を載せて「エミール・ヤニングスが如何に名優であつても、彼の天分と技術をこれ程までに發揮させたのはやはりデュボンの手柄だ。最後の人」ではヤニングスの演技が幾多の煩はしいトリックを通して現はれた。併し、この「ヴァリエテ」では、監督の技巧がもう技巧としては吾人の目に映らない。ほんやり見てもれば監督が勝手に役者に芝居をさせてゐるやうに見える。如何にも楽な監督のしやうをしてゐるやうに見える。そこにデュボンの大きな技巧があるのだ。絶頂を極めた技巧が

あるのだ。

デュボンの感覚的な描写についても言ひたいことが沢山あるが、読者の注意を喚起するに留めよう。赤んぼうのおしつこの件。赤んぼうに煙草の煙を吹きかけてそれを払ふところ。靴下の件(こは少し切られたやうだが)。主人公が寝仕度をしながら、女の寝仕度を盗み見るところ。女の不貞を知つてから、思はず道具裏でスリッパの音を高くさせて幕引に注意されるところ……まだそういつたところが沢山にあった。いづれも極めて芸術的な感覚描写である。

カール・フロイントのカメラワークにも驚くべき芸術と科学との結合があつた。だが何と言つても、ヤニングスである。この写真の価値は飽くまでもヤニングスである——と評しています。

更に海外の評の一例として、武蔵野館封切の際のパンフレットに、飯田心美氏の訳によつて紹介されている米国のフィルム・デイル誌の引用文には——カメラの巧妙な使ひ方によつて映画の劇的価値といふものが如何に強められるかという立派な実例が独逸人によつて示された。カール・フロイントという撮影者は、此のアメリカでは余り知られていないかも知れない。「ヴァリエテ」はその撮影者が最近に仕上げたもので今までの映画に此れ程工夫された撮影はなかつた。例を挙げれば次の通りである。(中略)多くのシーンがベルリンの有名な寄席ヴァイナル・ガルテンで撮られてゐる。沢山の見物人の頭上遙かに主役達の姿が眺められる。一方にはヤニングス、一方にはワーヴィック・ワード。先づ普通の撮影法である。その内にカメラは曲芸師の所へ飛んでワードの眼となる。これにはカメラが綱に結びつけられ電気仕掛けで動かされたのである。カメラ、レンズは曲芸師自身となつて、その場所からすべての有様が写される。此れは非常な成功である。(後略)——と記している。

なお、当時日本映画では、池田義信監督「真珠夫人」(栗島すみ子主演)、牛原彦彦監督「昭和時代」(鈴木伝明原作脚色主演)等が封切られていたことを参考までに付記します。(引用文すべて仮名づかい原文のまゝ)

## 「ヴァリエテ」について

E・A・デュボンの「ヴァリエテ」(二五)は、ドイツ

映画最盛期の代表作品の一つであった。ほく自身は、その当時これを見て、みんなのさわぐほど感心しなかつたおぼえがあるが、これほど当時一般にさわがれた映画はすくない。ほくがあまり感服しなかつた一つの原因は、趣味がそうよくない点と、誇張がおおい点にあった。それからまた、技術的には非常に凝つた作品だが、モンタージュには新鮮さがなかつたし、リズムにも欠けるところがあった。

——というところ、これを当時の代表作品とすることにほくが不服のようにとれるかも知れないが、そうではない。代表作品であるわけはつぎのような点にある。それまでのドイツ映画によく見られた表現主義的な一種の神秘主義や、カンマアシュビイル流のせまつくらしい感じから離れて、これが曲芸団の世界をえがきうごきとアクションを主にしたことは、一つの脱出であり、開放であった。

また、カメラの性能を拡大して、構図や角度や移動撮影のしかたに、表現のおおくをまかせたことも、新鮮な魅力であった。俳優の(ことにヤニングス)の背中や芝居させたり、カメラを人物の目におきかえたりした点は、たしかに当時の新技巧として価値のあるものであった。

だが、こうしたことが、E・A・デュボンの創意であったかどうかは、いささかうたがわしい。プロデュサーは、エリッヒ・ポマアであったし、撮影者はカアル・フロイントだったからである。そして、デュボンはこの映画ののち、いい映画はほとんどつくつていないのである。

(フィルム・ライブラリー運営委員 飯島正)

## エミール・ヤニングス主要出演作品

(括弧内製作年代)

「呪いの眼」エルンスト・ルビッチ (一九一九)

「パッション」エルンスト・ルビッチ (一九一九)

「カラマーゾフの兄弟」カール・フレリッヒ (一九二一)

「アラオの恋」エルンスト・ルビッチ (一九二二)

(一九二二)

「オセロ」ブッコウエッキイ (一九二二)

「最後の人」F・W・ムルナウ (一九二四)

「ニュー」パウル・ツインナー (一九二四)

「ヴァリエテ」E・A・デュボン (一九二五)

「タルチュフ」F・W・ムルナウ (一九二五)

「ファウスト」F・W・ムルナウ (一九二六)

「肉体の道」ヴァイクター・フレミング

(一九二七) 渡米第一回

「愛国著」エルンスト・ルビッチ (一九二八)

本邦未公開

「最後の命令」ジョセフ・フォン・スタンバーク (一九二八)

「嘆きの天使」ジョセフ・フォン・スタンバーク (一九三〇)

「激情の嵐」ロベルト・ジョドマク (一九三一)

「こわれた瓶」ギュスタフ・ヴッキイ (一九三九)

「祖国に告ぐ」ハンス・シュタインホフ (一九四〇)

「ヴァリエテ」は六月半ばまで毎水曜日に一回上映します。

なお、フィルム・ライブラリーでは五月五日まで、英米ソ四か国の漫画映画を毎日三回上映します。